

# F/T12

FESTIVAL/TOKYO



東京文化発信  
プロジェクト

## アンティゴネーへの旅の記録とその上演 / マレビトの会 Record of a Journey to Antigone, and Its Performance / marebito theater company

11/15 (Thu) - 11/18 (Sun)

にしすがも創造舎

Nishi-Sugamo Arts Factory



2020年オリンピック・  
パラリンピックを日本で!

© Keiko Sasaoka



# マレピト＝アンティゴネーの〈言葉〉と〈倫理〉

森山直人(演劇批評家／京都造形芸術大学教授)

劇作家はよく「言葉の力を信じたい」と口にします。けれども、その人はいったい「言葉」のどんな側面を捉えて「信じる」と口にはしているのでしょうか。えてしてそういうことを強調する人に限って、他者には届かない言葉をナルシスティックに肯定しているだけの場合が多いのには辟易するほかありません。松田正隆は、「言葉の力」を信じているという意味で、まぎれもない一人の「劇作家」です。彼は、自分が「言葉」のどんな側面を捉えて「信じる」ことを選択しているのかを、はっきりと自覚している数少ない「劇作家」だと言えるでしょう。

2004年の結成以来、「マレピトの会」の上演作品の多くが、「起承転結」型の古典的なドラマトゥルギーを解体する方向に向かってきたことは間違いありません。たとえば、松田の「ヒロシマーナガサキ」シリーズの最近作である『HIROSHIMA-HAPCHEON 二つの都市をめぐる展覧会』は、「展覧会形式」という独自のスタイルを採用していました。けれども、私はいずれも松田はデビュー当時から一環して「劇作家」であり続けているのだ、と主張したいと思います。驚くべきことに、そうやって彼は、まさしく劇の「言葉」を信じ、執拗に「言葉」を書き続けようとしているのだと。彼は「劇作家」の概念をたえず「拡張」しようとしている点では、ベケットに似ているところがあります(ただしベケットには、松田作品に特有の叙情性はありますが)。「マレピトの

会」とともに、リアリスティックな作風を大胆に捨てた彼は、いわば「言葉」の別の側面に向かって旅を開始することで、「劇作家」の拡張へ向かったのです。それをここでは、「帰属の不確かな言葉」への旅、と言っておきたいと思います。

ここで、ギリシャ悲劇『アンティゴネー』について考えてみましょう。同じソフォクレスの書いたとされる作品でありながら、『アンティゴネー』は、『オイディプス王』とはひどく違った印象を受けます。アリストテレスが『詩学』で賞賛しているように、『オイディプス王』は、劇の始まりから一直線に、見事なクライマックスへと突き進んでいきます。反対に『アンティゴネー』は、いつもどこか煮え切らないまま、劇は行ったりきたりしています。いったい妹のイスメネは、姉にどこまで協力するつもりがあるのか。あれほどクレオンの前で、法＝命令の不当性を理性的に訴えることのできたアンティゴネーなのに、いざ死者の国に赴こうとすると、「自分が幸せな結婚もできずに死ぬ」ことばかりを嘆いてしまうのか。そもそも一見「法の体現者」に見えるクレオンでさえ、予言者テイレスの言葉を聞いた後は、前言を撤回してアンティゴネー釈放に動いてしまうのです。

自分では知る術もなかった「罪」に直面して、自らの目をつぶし、自らを追放するというオイディプス王の振舞は、まさに模範的な責任の取り方です。それに対して『アンティゴネー』の人物たちは、誰一人自分の言葉に完全には責任を取る

ことができない。どうしていいかわからず、ただ右往左往しているだけの人々なのです。まさにこの点こそが、『アンティゴネー』という作品の最大の魅力なのかもしれません。哲学者で言えばヘーゲルからジュディス・パトラーまで、文学者で言えばヘルダーリンからコクトー、アヌイ、プレヒトに至るまで、数多くの人々が『アンティゴネー』を論じてきたことの秘密は、案外こういうところにあったのではないか。『アンティゴネーの変貌』を書いた批評家のジョージ・スタイナーは、この作品が、男と女、老年と青年、社会と個人、生者と死者、といった永久的な人間の葛藤と対立のすべてを表現している傑作であると語っています。けれども、よく読んでみると、そこに見えてくるのは、もはや男でも女でも父でも息子でもいられなくなった人々の途方に暮れた姿ばかりなのです。

言葉に責任を取る、とは、言葉の帰属性を明確にすることにほかなりません。けれども、人はいつでも言葉の帰属性を明確にすることができるとは限りません。『オイディプス王』と『アンティゴネー』の最大の違いは、前者の出発点には疫病が、後者には戦争があったということです。疫病は、まだしもそれを天のせい「帰属」させることができますが、人と人が殺し合いを始めた瞬間から、人は誰のせいにもできないカオスに巻き込まれるのです。ある瞬間の嘆きと、別の瞬間の怒りのあいだには、もはやなんの繋がりも見出すことができない、という過酷な生を強いられる

こと。——オイディプス的な「言葉」とは異質の、『アンティゴネー』という「言葉」のもうひとつの側に直面したときこそ、バラバラになった「言葉」に対する態度をどのように決定するか、という「倫理」の問題が生じるのです。

松田は、広島原爆ドームについて次のように述べています。「都市の景観の中で、違和感の権化のようなこの建築物が、ある意味、おさまるところを得たかのように調和している。原爆ドームだけが、ヒロシマの原爆を記憶し背負い、ひとまず原爆ドームさえ当時のことを思い起こさせてくれる象徴であれば、今の広島はあのヒロシマと一緒に現在を生き続けられるのだ、というようにも思える。つまり、私たち(生きている側の人間)は、あのヒロシマを平和記念公園の中で管理し、その区画から外に出られないように封じ込めているのである」。ここで言及されている「原爆ドーム」が、「原爆」という言葉の帰属先だとすれば、もはや誰の、いつの、どんな場所で発せられた言葉なのかも分からなくなる地点まで、帰属先を奪い去ってみることが必要なのではないか。そんな言葉に取り囲まれたとき、人はようやく倫理の問いに直面するのではないか。松田の果たさないそんな問いかけに、観客の私たちは、果たして最後まで旅を続けることができるのでしょうか。そもそも、「最後」など、いつ、どのように訪れるものなのでしょうか。

## 〈第一の上演〉レポート 劇に取り残されて 鈴木理映子（演劇ライター）



今年8月から11月初旬にかけて行われた『アンティゴネーへの旅の記録とその上演』の〈第一の上演〉は、予定の時間、予定の場所で、事前に公開された通りのテキストを演じる、ちょっと風変わりな市街劇シリーズだった。告知はツイッターで行われ、観客は何が起こるかを知らず、現場に足を運ぶ。まるで何かの儀式に立ち会うように。だがそれは、私たちの自身の身体と知覚を大いに戸惑わせる事件でもあった。

あるときは路上で、またある時はカフェの店内で、台詞を交わす俳優たちを眺める——。ただそれだけのことだったはずが、参列者には参列者の役割があると気づかされるのに、そう時間はかからなかった。ただでさえ普段は人気のない街角に数人の人が立ち止まれば目を引く。さらに、テキストには、絶叫も取っ組み合いも、いかにも異質な佇まいを漂わせた人物も登場するのだが（例えば髭を装着した女性が商店街を闊歩したり）、それらはみな、驚くほど「何喰わぬ顔」で遂行される。だからもし、もっといいアングルで観たいとか、はっきりせりふを聞きたいなどと思うなら、観客は、不自然に付近をうろついたり、演じ手の背後に近づかなくてはならない。それが、畏だ。結果として、私たちは、ずいぶんと分かりやすい「観客役」を演じさせられることとなる。道行く人が、ふと振り返るのは、その拙い演技のせい。それはこの企画を「演劇」足らしめる、最後のピースのようだった。

そもそも〈第一の上演〉は、架空の劇団による『アンティゴネー』の創作過程を、ツイッターやブログを通して見せる、〈読む演劇〉として企画されたという。だから、少なくともその時点では、実際の上演を目撃しているかどうかは、あまり問題ではなかったかもしれない。けれど、現場で体験したことは、さらに不思議な感覚をもたらした。日々の生活や個人的な思い出にもおよぶ登場人物たちのウェブ上の足取りを追い、さらに街中で「本物」を見かけるうち、私はついつい、彼らを「俳優名」ではなく、まるで実在の人物のように「名前(役名)」で捉えるようになっていた。「そんな馬鹿な」と思うだろう。だが、考えてみれば、例えばウェブ上で知った人物と、言動や趣味がそれなりに整合性のとれた人間が目の前に現れた時、私たちはなぜ、それを本物だと（あるいは架空だと）決めることができるのか——。巷にあふれる情報の量と事の真偽(虚実)は、いつも比例するとは限らない。

この市街劇の1回の上演は長くても10分程度。予告された場面を演じ終わると、登場人物たちは、ごく自然に立ち去り、街のどこかへ消えていった。だが、突然「(観客役の)俳優」にされた私たちに終演の合図は送られない。存在するのかしないのかさえ分からない人物の背中を見送り、ついさっき聞いたばかりの「劇の言葉」を反芻しながら、虚実の揺れ始めた街に、私たちはただ取り残されるのだった。

## 音響作品『横断の調べ』に関する自問自答のインタビュー 荒木優光(音響作家)

——今作は、地下1階と3階の2つの作品で構成されていますが、それぞれの作品について教えてください。

3階は現在の福島にマイクを向けた、個人の眼差しとしての音を構成した音響上演作品です。釣り人が釣り糸を垂らすように、福島にマイクを向けました。

そこで見たものや聞いたものをそのまま再生するのではなく、震災後の福島を訪れた、旅の印象を編集点として「眼差しの音楽」を作り、にしすがも創造舎に響かせたいと考えています。

地下は展示の音響作品です。目の見えない人による風景描写と、震災を経た福島の各地で録音した風景音。2つの「風景の語り」をヒントにして、それらを重ねた時にどういった眺めを獲得できるのか。風景音が入ったカセットテープをお客さんに再生してもらおう形をとっています。

——会場のにしすがも創造舎は、廃校になった中学校を再利用した施設です。この会場の持つ場所の特性は作品にどのような影響を与えていますか？

昔は中学校として機能していたという過去が、福島に関する作品を作るうえで大きなことでした。東京の西巣鴨で福島の音を再生することによって、にしすがも創造舎の過去も少しだけ再生されるような、その場と響き合わせることができなかなど。おかしな授業が行われているような感覚です。

——福島以外の場所も意識して作品を作られているということですが、どういうことでしょうか？

どこから、どのように、誰が「福島」を見るか。無数にある視点と個人の目を通じてどう遠くに思いを馳せられるのか。またそれらの横断により生じる摩擦をどう考えたらいいのか、ということを意識して作っています。

——作品制作にあたって、体育館での上演との関係性をどのように捉えていますか？

関係性はなるだけ意識せず、1つのテーマを共有して、作品は単体で作ることを心がけました。マレビトの会との共同作業は長年やらせていただいているので、大きな影響を受けているだろうし、でき上ったらおのずとこれまでの共同作業とは別の関係性が見えてくるのではないかと期待して。単体の作品として自立したうえで1つのプロジェクトになれば結局これまでと同じなので。そこはどうなるのか楽しみな部分です。

——ありがとうございました。

### 荒木優光

1981年山形県生まれ。2005年より独自に作曲を始める。映像・舞台作品での音響活動、楽曲提供を行い、2010年から録音した音で構成する音響作品を作り始める。過去に音響上演作品「@アッチ&コッチ～N市からの呼び声～」『横断の調べ#1』がある。バンド「NEW MANUKE」メンバー。マレビトの会では2008年「血の婚礼」より音響を担当し、以後「声紋都市—父への手紙」「PARK CITY」「都市日記 maizuru」「HIROSHIMA-HAPCHEON:二つの都市をめぐる展覧会」などの全ての作品に関わる。



## マレビトの会

2003年、舞台芸術の可能性を模索する集団として設立。代表の松田正隆の作・演出により、04年5月に第1回公演『島式振動器官』を上演する。07年に発表した『クリプトグラフ』では、カイロ・北京・上海・デリーなどを巡演、『HIROSHIMA-HAPCHEON: 二つの都市をめぐる展覧会』(F/T10・KYOTO EXPERIMENT 参加)は、韓国との共同製作を行うなど、その活動は海外にも広がる。主な作品に『声紋都市—父への手紙』(F/T09 参加)『PARK CITY』(YCAM、びわ湖ホールとの共同製作作品)『都市日記 maizuru』(09年)などがある。HPアドレス <http://www.marebito.org/>



「アンティゴネーへの旅の記録とその上演」第二の上演

出演：生実 慧、牛尾千聖、桐澤千晶、児玉絵梨奈、駒田大輔、島 崇、  
武田 暁、中本章太、西山真来、山口春美  
照明：藤原康弘  
演出：アイダミツル、藤原佳奈、松田正隆、三宅一平

音響作品「横断の調べ」～福島の海岸へ釣りに行った男～／～煙にまかれたジュークボックス～

音響・構成・演出：荒木優光

照明：筆谷亮也

音響：齋藤 学

音響オペレート：椎名晃朋

声：荒木優光、武田 暁（～福島海岸へ釣りに行った男～）／水本剛志、渡邊寛子（～煙にまかれたジュークボックス～）

舞台監督：寅川英司＋鴉屋、田中翼

宣伝写真：笹岡啓子

ドキュメント・ウェブデザイン：中山佐代

ドキュメントレイアウト：酒井一馬

舞台写真・映像記録：西野正将、田村友一郎

制作：新保奈未、中山佐代、森真理子、吉田雄一郎

協力：青木セイ子、小畑瑠子、上村 梓、金光男、栗原弓枝、小出麻代、  
山田卓矢、株式会社 POP、魚灯、福島県立盲学校、遊園地再生事業団

F/Tスタッフ

制作統括：武田知也

制作：小森あや

インターン：小林弘樹

フロント運営：藤田晶久、清水美峰子

プログラム・ディレクター：相馬千秋

F/Tクルー

宇都宮千陽、斎藤絵里佳、崎濱恵梨、鈴木智香子、中村みなみ、  
能戸みな美、松田早絵、松本雄哉

製作：マレビトの会、一般社団法人 torindo

共同製作：フェスティバルトーキョー

助成：芸術文化振興基金、公益財団法人アサヒグループ芸術文化財団

主催：フェスティバルトーキョー、マレビトの会



財団法人 アサヒビル芸術文化財団

芸術文化振興基金

アーティスト・トーク

11月16日(金) 18:15～19:00 マレビトの会×開沼博(社会学者)

11月17日(土) 18:15～19:00 マレビトの会×平田栄一郎(慶応義塾大学教授/ドイツ演劇・演劇学)

11月18日(日) 終演後～1時間程度 マレビトの会×諏訪敦彦(映画監督)

"Record of a Journey to Antigone, and Its Performance" Second Staging

Cast: Satoshi Ikuzane, Chise Ushio, Chiaki Kirisawa, Erina Kodama, Daisuke Komada, Takashi Shima, Aki Takeda, Shota Nakamoto, Maki Nishiyama, Harumi Yamaguchi

Lighting: Yasuhiro Fujiwara

Direction: Mitsuru Aida, Kana Fujiwara, Masataka Matsuda, Ippei Miyake

Sound Work: "Transit Melody" A Man Who Went Fishing on the Coast of Fukushima / A Jukebox Wrapped in Smoke

Sound, Concept, Direction: Masamitsu Araki

Lighting: Ryoya Fudetani

Sound: Manabu Saito

Sound Operator: Kouji Shiina

Voice: Masamitsu Araki, Aki Takeda (A Man Who Went Fishing on the Coast of Fukushima) / Takeshi Mizumoto, Hiroko Watanabe (A Jukebox Wrapped in Smoke)

Stage Managers: Eiji Torakawa + Karasuya, Tsubasa Tanaka

Photography: Keiko Sasaoka

Document & Website Design: Sayo Nakayama

Document Layout: Kazuma Sakai

Stage Photography, Video: Masanobu Nishino, Yuichiro Tamura

Production Co-ordination: Nami Shimpo, Sayo Nakayama, Mariko Mori, Yuichiro Yoshida

Co-operation from Seiko Aoki, Keiko Obata, Azusa Kamimura, Mitsuo Kim, Yumie Kurihara, Mayo Koide, Takuya Yamada, POP Co., Ltd, Gyoto, Fukushima Prefectural School for the Blind, U-ench Saisei Jigyodan

F/T Staff

Production Manager: Tomoya Takeda

Production Co-ordinator: Aya Komori

Trainee: Hiroki Kobayashi

Front of House: Akihisa Fujita, Mihoko Shimizu

Program Director: Chiaki Soma

F/T Crew

Chiaki Utsunomiya, Erika Saito, Eri Sakihama, Chikako Suzuki, Minami Nakamura, Minami Noto, Sae Matsuda, Yuya Matsumoto

Produced by marebito theater company, General Incorporated Association torindo

Co-Produced by Festival/Tokyo

Supported by Japan Arts Fund, Asahi Group Arts Foundation

Presented by Festival/Tokyo, marebito theater company

## フェスティバル/トーキョー組織委員

### Festival/Tokyo Organization Committee

天牛大生	振付家、演出家
萩田伍	アサヒグループホールディングス株式会社代表取締役会長兼 CEO
扇田昭彦	演劇評論家
永井多恵子	社団法人国際演劇協会 (ITI/UNESCO) 日本センター会長
鶴川希雄	演出家
野田秀樹	演出家
野村高樹	狂言師
福原義春	株式会社資生堂 名誉会長 (五十台期)
Ushio Amagatsu Hiroshi Ogita Akihiko Senda Takao Nagai Yuko Ninagawa Hidenori Noda Man Nomura Yoshihara Fukushima	Choreographer, Director Chairman and Representative Director, Chief Executive Officer, Asahi Group Holdings, Ltd. Theatre critic Chairman, Japanese Centre of International Theatre Institute (ITI/UNESCO) Director Director Kyogen actor Honorary Chairman, Shiseido Co., Ltd.

主催：フェスティバル/トーキョー実行委員会  
東京都、豊島区、  
東京文化発信プロジェクト室・東京芸術劇場 (公益財団法人東京都歴史文化財団)、  
公益財団法人としま未来文化財団、NPO法人アートネットワーク・ジャパン

Organized by Festival/Tokyo Executive Committee  
Tokyo Metropolitan Government, Toshima City, Tokyo Culture Creation Project & Tokyo Metropolitan Theatre (Tokyo Metropolitan Foundation for History and Culture), Toshima Future Culture Foundation, Arts Network Japan(NPO-JAN)

共催：社団法人国際演劇協会 (ITI/UNESCO) 日本センター

Produced in association with Japanese Centre of International Theatre Institute (ITI/UNESCO)

協賛：アサヒビール株式会社、株式会社資生堂

Sponsored by Asahi Breweries, Ltd., Shiseido Co., Ltd.

助成：公益財団法人アサヒグループ芸術文化財団

Supported by Asahi Group Arts Foundation

後援：外務省、公益社団法人日本芸能実業家団体協議会

Endorsed by Ministry of Foreign Affairs, GEIDANKYO

特別協力：西武池袋本店、東武百貨店池袋店、サンシャインシティプリンスホテル、  
ホテルメトロポリタン、ホテルグランドシティ、チノコット株式会社、株式会社白水土社

Special co-operation from SEIBU IKEBUKUROHONTEN, TOKYO DEPARTMENT STORE IKEBUKURO, Sunshine City Prince Hotel,  
Hotel Metropolitan Tokyo, Hotel Grand City, Chacott Co., Ltd., Hakusuiya Publishing Co., Ltd.

協力：東京商工会議所豊島支部、豊島区商店街連合会、豊島区町会連合会、  
豊島区観光協会、社団法人豊島産産協会、公益社団法人豊島法人会

In co-operation with The Tokyo Chamber of Commerce and Industry Toshima,  
Toshima City Shopping Street Federation, Toshima City Federation, Toshima City Tourism Association,  
Toshima Industry Association, Toshima Corporation Association

宣伝協力：株式会社ポスターハリス、カブニコ、  
有限会社ネビュラエクストラサポート (公認/プログラム)

PR support: Poster Haris's Company, Nebula Extra Support Co., Ltd. (for FTJ Emerging Artists Program)

メディアパートナー：J-WAVE 81.3 FM、新潮、ARTIT、CINRA.NET

Media Partners: J-WAVE 81.3 FM, SHINCHO, ARTIT, CINRA.NET

認定：公益社団法人企業メネ協会の協賛

Approved by Association for Corporate Support of the Arts

平成24年度文化庁 地域発・文化芸術創造発信イニシアチブ

Supported by the Agency for Cultural Affairs Government of Japan in the fiscal 2012

会期：平成24年(2012年)10月27日(土)～11月25日(日)



## フェスティバル/トーキョー実行委員会

### Festival/Tokyo Executive Committee

名誉実行委員長	高野之夫	豊島区長
実行委員長	市村作知雄	NPO法人アートネットワーク・ジャパン 会長
副委員長	吉末昌弘	豊島区文化商工部長
委員	八巻規子	豊島区文化商工部文化デザイン課長
	大沼映雄	公益財団法人としま未来文化財団 常務理事/事務局長
	岸正人	公益財団法人としま未来文化財団 部長
	塩池宗晴子	NPO法人アートネットワーク・ジャパン 代表
	相馬千秋	NPO法人アートネットワーク・ジャパン プログラム・ディレクター
監事	天貝勝己	豊島区総務部総務課長
法務アドバイザー	榎井健策	北海道弁護士 (常置型法律事務所)

Honorary President of the Executive Committee: Yoko Takano, Mayor of Toshima City  
Chairman of the Executive Committee: Sachio Ichimura, Director of Toshima City  
Executive Committee Members: Masahiro Yoshino, Director of Culture, Commerce and Industry Division of Toshima City  
Committee Members: Noriko Yamaki, Culture, Commerce and Industry Division, Director of Cultural Design Section  
Hideo Onuma, Director of Secretariat of Toshima Future Culture Foundation  
Masato Kishi, Executive Manager of Toshima Future Culture Foundation  
Naoko Hasegawa, Arts Network Japan Representative  
Chiaki Sano, Arts Network Japan Program Director  
Supervisor: Kazumi Amagai, General Affairs Division, Director of General Affairs Section of Toshima City  
Legal Advisors: Kenzaki Fukui, Hisato Kitazawa (Kotou Dori Law Office)

## フェスティバル/トーキョー実行委員会事務局

### Executive Committee Office

プログラム・ディレクター	相馬千秋
事務局長	運池奈緒子
事務局長補佐	小島寛大
制作総括	武田知也
制作	河合千佳、喜友美麻江、小森あや、相山由香、 戸田史子、藤井さゆり
メディア戦略	松本花音
プログラム・リサーチ	クラウハイム・ウルリケ
アジア事業コーディネーター	小山ひとみ、李丞孝
票務管理	兵原理江、岡戸円
チケットセンター	佐々木由希子、佐藤久美子
総務	葦原円花、一色真寿
経理	堀久美子
小製作アシスタント	小野塚英、砂川史織、田中沙季、田野入涼子、中山亜以
メディア戦略補佐	冠根葉奈
アジア事業コーディネーター補佐	吉岡真衣子
インターン	伊藤芽依、小林弘樹、田端俊也、船橋史、吉崎香央里
技術監督	賀川英司
技術監督アシスタント	河野千秋
照明コーディネーター	佐々木真喜子 (株式会社ファクター)
音響コーディネーター	相馬千秋 (有限会社サウンドワイズ)
アートディレクション+デザイン	アジール (佐藤雅樹+中澤耕平+谷藤千十+徳友明子+菊地隆隆)
ウェブサイト	演田真一 + 田中裕也 (株式会社ソノノ)
パブリシティ	平子宇、望月章宏
海外広報・翻訳	アムドゥース・ウィリアム
物販	渡辺淳
編集・執筆	鈴木理映子
編集・執筆 (「TOKYO/SCENE」)	影山裕樹

Program Director: Chiaki Soma  
Administrative Director: Naoko Hasegawa  
Assistant Administrative Director: Hirotoomo Kojima  
Production Manager: Tomoya Takeda  
Production Co-ordinators: Chika Kawakami, Orii Kiyuna, Aya Komori, Yuka Sugiyama, Fumiko Toda, Sayuri Fujii  
Media Strategy: Kanako Matsumoto  
Program Research: Ulrike Krauthelm  
Asia Projects Co-ordinator: Hitomi Oyama, Seunghyo Lee  
Ticket Administration: Rie Kagahara, Fumiko Shihoda  
Ticket Office: Yumiko Saeki, Kumiko Sato  
Administrators: Madoka Ashihara, Hisayoshi Isshiki  
Accounting: Kamiko Tsutsumi  
Assistant Production Co-ordinators: Chika Onozaka, Shiori Sunagawa, Saki Tanaka, Suzuko Tanohri, Ai Nakayama  
Assistant Media Strategy: Nanana Kanamori  
Assistant Asia Project Co-ordinator: Makiko Yoshioka  
Trainees: Mei Ito, Hiroki Kobayashi, Toshiya Tateba, Fumi Funahashi, Kaori Yoshizaki  
Technical Director: Eiji Torikawa  
Assistant Technical Director: Chizuru Kono  
Lighting Co-ordination: Makiko Sasaki (Factor Co., Ltd.)  
Sound Co-ordination: Akira Aikawa (Sound Weeds Inc.)  
Art Direction+Design: Asyū (Naoki Sato + Kouhei Nakazawa + Yoko Tani + Akiko Tokunaga + Masataka Kikuchi)  
Website: Shinichi Hamada + Yoko Tanaka (Ito+wa+ki)  
Public Relations: Masako Taira, Akhino Mochizuki  
Overseas Public Relations, Translation: William Andrews  
Merchandise: Jun Watanabe  
Editor/Writer: Rieko Suzuki  
Editor/Writer (TOKYO/SCENE): Yuki Kagayama

FTJクルー：会津麻美、青島美和、安達彩、石引康子、一ノ瀬真志、若城幸志、止村康哉、宇都宮千晴、内海さき、遠藤乃乃子、大泉尚子、大貫啓子、大庭愛香、岡崎由子、緒方彩乃、岡本光代、岡本佳子、尾澤弥生、小野千尋、加藤真帆、鹿子不直美、金子椿高、川口 潤、木口七海、木下玉美、金せらみ、許智繪、桐谷佳実、黒沢友実、黒沢寛子、齊藤聖、齋藤絵里佳、崎渡聖梨、畑渡香里、佐藤音子、齋藤裕子、柴田知子、鈴木智香子、岡島弥生、高橋悠祐、田中希希、寺本奈津美、照沼静香、陶 旭起、水杉彩子、中村真樹、中村みづみ、中山由紀、西岡行、能戸みな美、畑満富実、初村和実、花田雅美、早川幸菜、林原 菜、人見真央、廣瀬加乃、福原麻梨子、福村 芽、藤原颯太、船川結菜、増尾 志、松嶋環菜、中村早絵、松本雄哉、丸山未來、三橋泰正、関 慧效、矢島樹、内藤智司、山田布紀、山室木園、山分可子、丹野亜希、吉田由実、米谷今日子、渡辺 夏

FTJ Crew: Mami Aizu, Miwa Onozawa, Aya Akachi, Yasuko Ishibiki, Takashi Ichinose, Taito Iwaki, Yasunasa Usugui, Chiaki Utsunomiya, Chiaki Utsumi, Noriko Ozumi, Ozumi Naoko, Keiko Ogo, Aika Omichi, Yuko Okazaki, Aoyu Ogata, Mitsuyo Okamoto, Yoshiko Okamoto, Yoyo Otawa, Chihiro Ono, Maho Kato, Naomi Kaneko, Joy Kaneko, Akane Kawaguchi, Nanami Kiyochi, Tamako Kishida, Shiroki Kishino, Saorin Kim, Chiyo Kuro, Yoshimi Kiritani, Tomomi Kurokawa, Hiroko Kozaki, Naomichi Nakano, Erika Saito, Eri Sakikawa, Yukiko Sato, Kyoko Sato, Mumeo Shimotani, Tomoko Shibata, Chikako Suzuki, Yayoi Sekijima, Yusuke Takahashi, Yuki Tanaka, Natsumi Teramoto, Shizuka Tokumura, Xuru Tani, Sayoko Nagai, Naoko Nakamura, Mimiaki Nakamura, Yuki Nakayama, Takayuki Nakasaki, Mirami Noto, Fumi Hatase, Kazumi Hatsumura, Masami Hanada, Haruna Hayakawa, Shiori Hayashibara, Mami Himoto, Kano Hirose, Mariko Kohizuka, Miki Furukawa, Kei Masakawa, Kei Masakawa, Rina Matsumura, Sae Matsumoto, Yoya Matsumoto, Mirai Maruyama, Yasunasa Mizuro, Hyemin Min, Aya Tojima, Saeji Tanaka, Yuki Yanaguchi, Kizono Yamamura, Masashi Yamawaki, Aki Yumino, Yuki Yoshida, Kyoko Yonemitsu, Sara Yamabae

編集：鈴木理映子、フェスティバル/トーキョー実行委員会事務局  
発行：フェスティバル/トーキョー実行委員会  
アートディレクション+デザイン：佐藤雅樹+中澤耕平 (ASYL)  
オペレーション：小松 剛  
印刷：アトミ株式会社  
発行日：2012年11月15日  
禁無断転載

お問合せ先  
フェスティバル/トーキョー実行委員会事務局  
〒170-0001  
東京都豊島区西池袋4-9-1 にしすがも創造舎 NPO法人アートネットワーク・ジャパン内  
TEL: 03-5961-5202  
HP: http://festival-tokyo.jp/